

4. 平城京における地鎮

建物の造営に先立ち、地の神を鎮め祭るために行う地鎮供養は、今日も一般的にみられる重要な造営儀式の一つである。この地鎮供養は『日本書紀』によると藤原宮造営時には既に行われており、平城宮の造営に際しても「鎮_ニ祭平城宮地_一」と『続日本紀』にあるところから、宮の造営に先行して宮地を鎮め祭ることが8世紀には制度化していたものと考えられる。宮地の地鎮供養に関しては未だその具体的内容は明らかではないが、平城京内からは近年の調査の進展により、地鎮供養に伴う鎮物埋納品と推定される遺物が何例か発見されており、こうした造営儀式が寺院や宮殿のみならず平城京内に広範に浸透していたことを物語っている。そうした平城京の鎮物埋納例をまとめるとtab.5のようになる。

鎮物埋納例は今回の調査例を含め現在までに5例を確認できるが、1・2・4のように掘立柱建物の柱穴に埋納する例が多い点が注目される。埋納位置は身舎の四隅に限られるものの、特に一定の方角には定まっていない。また、鎮物が埋納された建物は、1のS B 970が桁行5間、梁間4間の南北両面廂付東西棟で9世紀前半代における十五坪の主屋であり、4のS B 2390が桁行6間、梁間3間の東・南二面廂付南北棟で九坪における脇殿的性格の建物であり、ともに宅地内の主要建物に限定されるようである。1では柱穴内におかれた礎板下面に銭が付着した状況で出土し、4では柱の周囲を礫と瓦片で固定した根巻状施設の下から銭が出土しており、柱穴を穿ち柱を立てる際に埋納された立柱祭に伴う鎮物である可能性が高い。これに対して5の今回の出土例は、上記の例とは以下の2点で大きく異なっている。第一に土器を容器としてその中に鎮物を納める点、第二に埋納物が特定の建物と直接結びつかない点であり、平城京内では従来知られていなかった鎮物埋納のパターンである。今回の出土例に近似するものとしては、1983年に法隆寺の旧南門前から発見された埋納物が想起される。これは径1.2 mの円形土壇内に埋納された土師器碗の中に2枚以上の和同開珎と金箔が納められていたもので、西院伽藍完成時に行われた地鎮め供養(後鎮祭)に伴う埋納物と考えられている。今回の出土例も供養の対象が建物と結びつかない点や三坪のほぼ中央に掘られた土壇内に埋納されている点などを考慮すると、建物造営に先立ち、もしくは建物竣工後に行う地鎮め供養に伴う鎮物埋納とみるべきで、平城京内で確認された唯一確実な地鎮祭の資料として高い価値を有しているといえよう。

註『延喜式』(踐祚大嘗祭式大嘗宮条)には大嘗宮^{ア+}の造営にあたり「始掘_ニ殿四隅柱_一」とあり、四隅の柱穴を決定しその柱穴から掘り始めるのが掘立柱建物通有の工法と考えられる。

	条 坊 位 置	調査年	埋 納 物	埋 納 位 置	時 期
1	左京三条二坊十五坪	1974	和同開珎 1	S B 970 身舎西北隅柱穴	9 C 前半
2	左京四条三坊一坪	1977	水晶玉 1	S B 07 身舎西南隅柱穴	奈良時代
3	右京二条二坊十六坪	1981	和同開珎 4 以上	S B 545 南廂部分	奈良時代初頭
4	左京四条四坊九坪	1982	和同開珎 1	S B 2390 身舎東北隅柱穴	奈良時代後半
5	左京三条二坊三坪	1983	須恵器壺内に和同開珎 2	三坪のほぼ中央(S X 2982)	奈良時代後半

tab. 5 平城京における鎮物埋納例